C 年大斎節第 3 主日　ルカ 13 章 1―9 節

［直訳］

1 だが居合わせた　ある者たちが　ちょうどその時に
告げつつ　彼に　ガリラヤ人たちについて
その者たちの　血を　ピラトが混ぜた　彼らのいけにえと一緒に。
2 そして　答えて　彼は言った　彼らに、
「あなたがたは思うのか　次のことを
これらのガリラヤ人たちは
罪人たちで　すべてのガリラヤ人たちより　あった、
というのは　これらのことを　彼らが被った
3 決してそうではない、　私は言う　あなたがたに、
むしろ　もし　あなたがたが悔い改めないなら
すべて　同じように　あなたがたは滅びるだろう。
4 あるいは　あの十八人は
その者たちの上に　落ちた　塔が　シロアムにおいて
そして　それが殺した　彼らを、
あなたがたは思うのか　次のことを
彼らは　負い目をもつ者たちで　あった
エルサレムに住んでいるすべての人たちより
5 決してそうではない、　私は言う　あなたがたに、
むしろ　もし　あなたがたは悔い改めないなら、
すべて　同様に　あなたがたは滅びるだろう」。
6 だが、彼は言っていた　このたとえを。
「いちじくの木を　持っていた　ある者が
植えられたものを　彼のぶどう園に、
そして　彼は来た
捜しつつ　実を　それにおいて
そして　彼は見つけなかった。
7 だが彼は言った　ぶどう園の園丁に向かって、
『見よ　三年が
その時から　私が来る
捜しつつ　実を　このいちじくの木において
そして　私は見つけない。
［それで］あなたが切り倒せ　それを、
なぜ　そして　土地を　それは無駄にふさぐのか』
8 だが彼は　答えて　言う　彼に、
『主人よ、あなたはそのままにしなさい　それを　この年も、
その時まで　私が掘る　その周りを　そして　私が投げる　肥料を、
9 そしてもし　確かに　それがつくる　実を　来ようとしている年の中に。
だがもし　ないなら　実際に、
あなたが切り倒すだろう　それを。』」

［新共同訳］

1 ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。2 イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。3 決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。4 また、シロアムの搭が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。5 決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

6 そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。7 そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』8 園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。9 そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

①構成

ⓐ 1―5 節

㋐ 2―3 節と 4 節四行目以下はどちらも

あなたがたは思うのか、…罪人たち（負い目をもつ者たち）であったと。

決してそうではない、…あなたがたは悔い改めないなら、…あなたがたは滅びるだろう

と述べており、同じことの繰り返しと言える。この繰り返しの中で最も強く響く表現は「決してそうではない」だと思われる。イエスは「決してそうではない」と述べることによって、人々の罪責観を訂正しようとしている。二つの可能性が考えられる。

⑴不幸に遭った人だけが「罪人」なのではなく、あなたたちも掟を完全には守っていないから、同じ「罪人」だ。

⑵イエスの到来によって、罪の内実がまったく変わった。罪とはイエスを通して赦しを与える神の愛に信頼できないことだ。

ⓑ 6―9 節

㋐ 6―7 節で波線をつけた表現は同じである。同じ表現が繰り返されているが、7 節では「見よ、三年が」が加えられ、三年も忍耐し続けたことが強調されている。

㋑ 9 節一行目は不完全な文章である。何を補うかによって、「もし手入れをするなら、…実をつくる」か、あるいは「もし…実をつくるなら、それでよい」の意味になる。

②悔い改め（1―5 節）

ⓐ 1 節の「ピラトが（ガリラヤ人の）血を（彼らの）いけにえと一緒に混ぜた」は比喩的な表現であり、「ガリラヤ人を血祭りにあげた」を意味するか、殺害時刻といけにえの時刻の同時性を指

していると思われる。このピラトによるガリラヤ人虐殺事件をイエスに告げる者がいた。イエスはそれを利用し、シロアムの塔の崩壊事故による死者にも触れて、すべての人が「悔い改め」なければならないと教える。

ⓑ語順や単語、比較の対象の違いはあるが、2節二行目から3節と4節四行目から5節では同じ構文が繰り返されている。4節では「罪人」ではなく、「負い目をもつ者（オフェイレテース）」が用いられている。この語は文字通りには「借金をしている人」の意味だが、そこから「罪過を負う人」という意味も出て来る。この場合、他人に対する「罪過」についても、神に対する「罪過」についても使われる。さらに、比喩的に「責任がある」の意味で使われることもある。

ⓒユダヤ人社会において、律法を忠実に守らない（あるいは守れない）人々は「罪人（ハマルトーロス）」と呼ばれた。この「罪（ハマルティアー）」とは神に対する罪のことである。ハマルティアーとは、元来「標的に当て損なうこと・失敗」を意味する。人間にとって、向かうべき神の方に向かっていない状態、道からはずれている状態が罪である。そしてファリサイ派の人々は、こうした神に対する罪の重さと災難の大きさの間には、因果関係があると考えていた。彼らにとって、人が遭遇する災難はその人の罪の結果である。しかし、イエスはそのような罪責観を否定し、すべての者が悔い改める必要があることを教える。

ⓓイエスは、まず神の国が到来し、罪が赦されると説き、救いの恵みに基づいて生きることを悔い改めと考える。従って、イエスは、神が悔い改めを引き起こすと言うだけでなく、悔い改めに先立ってすでに赦しが与えられていると主張する。ルカは悔い改める必要のない正しい人よりも、悔い改める罪人についてより大きな喜びが天にあると言う（ルカ一五7）。罪深い生き方をやめることができるのは、イエスの到来によって罪の赦しと救いが与えられたからである（ルカ四16―21、五23、七47以下）。悔い改めとは、イエスを通して示された神の恵みに信頼し、神に立ち帰ることである。

③いちじくの木のたとえ（6―9節）

ⓐ1―5節は、人の取るべき態度として「悔い改め」を述べ、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」という警告が二回繰り返される。この警告は、6―9節では「いちじくの木」のたとえによって示されているが、このたとえはさらに、神が取り続ける態度として「忍耐」を強調する。

ⓑ「捜す（ゼーテオー）」と「見つける（ヘウリスコー）」は、ルカがよく使う表現である（一一9・10・24、一五8）。イエスは「失われたものを捜して救うために来た」（一九10）。「失われたもの」とは「罪人」（一三2）、「負い目をもつ者」（一三4）のことである。「捜す」「見つける」とは、神の救いの業を表す表現である。

ⓒぶどう園に植えたいちじくが実をならせる時期になったとき、主人は期待に胸をふくらませて、やって来て実を「捜した」。しかし、「見つけなかった」。それも「見よ、三年が」とあるように、三年間も失望を味わい続けた。主人は十分に忍耐したのだから、「あなたが切り倒せ」と園丁に命じるのも当然である。しかし、園丁は「あなたはそのままにしなさい」と答える。今年、懸命に手入れをするから、来年まで待ってほしいと願っている。

ⓓ9節の条件文は中途半端な形で書かれていて、言葉を補わなければ意味が通じない。次の可能性

がある。

「もし手入れをすれば、来年は実をつくる」
「もし来年に実をつくるなら、それでよい」

しかし、中途半端な形で書いたことには意図があり、この園丁の期待と不安を表すためかも知れない。いちじくの木を切り倒したくはない園丁は「今年も手入れをすれば実をならせるかも知れない」と期待をかけると同時に、「もし来年に実をならせるなら、それでよいのだが」と不安をのぞかせている。しかし不安が現実となり、切り倒さねばならなくなったときも、「あなたが切り倒すだろう」と述べて、自分で手を下すことを拒んでいる。

ⓔこのたとえに登場する「主人」は神であり、「園丁」はイエスと読むこともできるが、むしろ、主人と園丁の対照的な態度によって神の葛藤が描かれていると考えるほうがよいだろう。神が悔い改めない者を裁くのは当然である。しかし、一方では、その人を慈しむあまり手を下せず、あと一年待とうとする。この一年は無意味な時間ではなく、神の不安と期待が交差する一年である。この一年をどのように使うかそれが問われている。

④神の愛に気づき、神のもとに立ち帰る

ⓐ当時のユダヤ人は、ある人に不幸が降りかかれば、それはその人の罪のせいだと考えていた。不幸を天罰と見るこの考え方は、ともすれば、不幸が襲わず平和に暮らす「私」には罪がないという過信につながる。他人の災難を語ることが、自分の安泰の確認になっている。しかし、イエスはそのような考え方を否定して、「決してそうではない」と言う。罪は災難としてだけ表れるような陰の薄い力ではなく、すべての人に根強くはびこる現実だと教える。罪は掟を守り切れないことであるが、神がイエスを世に与えた今は、むしろ神の愛に信頼できないことこそ罪深さなのである。神はイエスを世に送り、罪を赦す愛を示した。この愛に信頼せず、自らの力だけで清くなろうとする頑なさが罪なのである。

ⓑ罪がないと思い込んだり、神の愛に信頼せずにいれば、あなたがたは「すべて」、皆が同じように滅びることになる。「滅びるだろう」は未来形であるが、これは終末の時の裁きが念頭に置かれているからである。罪を赦す神の愛に信頼できずに罪に留まるなら、例外なく「皆すべて」が神との決定的な断絶を招くことになる。この滅びは単なる生物学的な死ではなく、さらに深いレベルでの滅びであり、「いのち」を永遠に失うことである。だが悔い改めて神との関係を回復するなら、新しい未来が与えられる。イエスが求める「悔い改め」は行いを改めることというよりは、独り子において罪を吹き払った神の愛に気づき、その神のまなざしへと向き直る方向転換のことである。

ⓒ主人は「あなたが切り倒せ」と命じ、園丁は「あなたが切り倒すだろう」と答える。これは神の中での葛藤であり、そこに神の愛が示されている。実を結ぶとはこの葛藤に気づき、そこに愛を見て、それに信頼することである。この信頼が行いへの原動力となる。このたとえは、悔い改めない者は裁きを受け、神の国の救いに入ることができないと警告するとともに、今こそがイエスによって招かれている悔い改めの時である、と教える。神は救いを与えようと決意した、とイエスは告げる。イエスの呼びかけに聞き従い、神に立ち帰る者が救いへの道を歩き始める。